
星と星が惹かれあう時

星乃灰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星と星が惹かれあう時

【Nコード】

N1761C

【作者名】

星乃灰

【あらすじ】

星と星は惹かれあい、反発されていく…それはまるで磁石のS極とN極のように…新米エクソシストの観澤メイはある日衝撃的な形でエクソシストである神田ユウに出逢う…すれ違いな気持ちの中、いったいどうなっていくのだろうか…？最初はお互い唯のエクソシストとしか見ていなかったが、どんどん惹かれあっていくのであった……

第0夜：始まり：二人（前書き）

此れはD・GRAY-MANの夢小説です。主に出るのは神田ユウとなります。女性キャラや初に見る名前はオリジナルキャラクターと思ってください。

少々裏の方に行く場面も無いことはないと思われますので、其処の所は苦手な方はどうぞ見るのを辞めてください。

第0夜：始まり：二人

それは…まるで世界が星のカナタに飛んで行ったような気持ちだった。

世界の中で人間は5万…いやそれ以上はいる筈。なのに今キミとめぐり合えた。

一見男勝りな女の子のように見えるけど、立派な男の子だった。とても綺麗でとてもかっこよくて、思わず見とれる。なのに好きな食べ物が蕎麦なのが可愛いところ。少しずつ私はアナタに引かれつつあります。けどこの思いは絶対に伝えられないんだよ？だって、この距離を保ちたいから。遠くさせたくないから……

はじめは得に気にしない唯の餓鬼だとしか見ていなかった。すぐに真っ赤になってすぐに笑い、すぐに怒るから煩いヤツだとかしか思っていなかった。なのに、今ではお前と出会えてすごく感謝している。お前だけを見ていたいと、この世の中で一番大事だと思う。こんな風に想うのは、俺はお前が気になると、引かれているといえるのか？どうしたら此の隙間を無くせれる？俺とお前の関係を壊さずに……

神田ユウ、エクソシストで黒の騎士団所属。装備型のイノセン

スで刀。

観澤メイ、工新米であるがクソシストで黒の騎士団所属。装備型のイノセンスでナイフ。

此の二人が巻き起こす数々のすれ違いな気持ち。最後は一体どうなるのだろうか…？

アナタに出逢えたのは偶然であって必然だったのかもしれない。星と星が近づくにつれて、私達も引き付き合っているのかもしれない。だけど、何所かの星が割りはいると同じ極のように反発しあうような磁石になってしまいかもしれない。どうしたら此の距離は…綺麗になくなるのですか？私はアナタと離れたくありません。たとえ世界を敵にしようと……

お前だけは離さない。ずっと俺の傍にいてくれ。お前の全てが愛しくて仕方が無い。お前が愛しい…誰が邪魔しようとアイツと俺の間にはいるとただじゃおかねえ。お前だけが俺の傍にいてくれればいい。俺はお前が…必要なんだ……………

ねえユウ…どうしてファーストネームで呼んだら駄目なの???心
の中では呼ばせてもらうね…だって、アナタが愛しくてたまらない
の。初めてであったときはあんなに仲が悪かったのに…変だね。き
っと私とアナタのあの変な出逢いが無かったら、今はお互い名前も
まともに覚えていなかったんだろ? だからね? 私はある出逢い
方、結構好きになっちゃったよ?

お前を名前で呼ぶのには凄く俺には難しい事だ。きつとこれから
も数を数えるぐらいなのかもしれない。だけど、あの時にお前とあ
の衝撃的な出逢いをしなければ、きつとお前とこんな仲にならな
かったのかもしれない。俺は俺である出逢い方は結構気に入ってい
るんだ。お前と出会えて、本当に良かったからな

第1夜：かぼちゃ少年：メイ

「…こ…此処は何処です…か…？」

さてどうしましょう…私、今いる場所がわかりません。観澤^{みさわ}メイ…ピンチです。とりあえず何所かの街だとは想うのですが…周りにはかぼちゃの被り物を被った人と魔女の服を着た人がチケットを売っているみたい…とりあえずあの人達に聞けば何か分かるかも…

「あの…すみません、黒の教団にはどういけばいいのでしょうか…？」

「はいいいいいい！！？あなた…黒の教団の事を知っているんですか！？つとと言うか僕はいいものの他の方にそのような事を聞いてあげませんか？つで…？どうして黒の教団の事を知っているのですか？」

突然の質問攻めにあわてた私ですが、とりあえず事情を説明するべく、回想をそのかぼちゃ（？）少年に話す。

それは2ヶ月前の事、私は“ファミル元帥”と言う方と共にAKUMAと戦う為に修行らしきモノをしながら旅をしていた。だけどもある日、滅多に無いようにファミル元帥がコーヒーを渡してくれたかと思えば話し出す。

「メイよ、お前もそろそろエクソシストと名乗ってよしとする。詳しくは黒の教団にいけ。場所は…まあ西に進めばあるだろ。そんじやあ此れ飲んだらいけよ」

「元帥…？元帥は行かないのですか？」

「俺は東へ向かう。さあ早く飲めや！！」

半強制的になりながらもコーヒーを飲むと何故か意識が飛びそうになり…

「元帥… もしや毒を…?」

「まさかw入れたのは睡眠薬だ。とつと寝ろ」

「バツクレル気ですか?」

「俺は東に向かうんだよ。安心しろ。コムイに紹介状を書いて置くから」

そして最後にみた元帥の顔は何かを企んでいるような笑みであり、私は意識を遠くした。起きて私はとりあえず黒の教団を目指し、西に進むことにして、今道に迷いましたつと言つ事です。

「何だか何所かしてみた光景ですね…」

「つと言つ事で…すみませんが黒の教団を知っているようですので教えて下さい!」

「其の前に…あなたもエクソシスト…なのですか?」

一瞬“あなたも”つと言つのに反応をした。…“も”…???“も”つと言つ事はもしかの人も…もしかしたらのもしかしたら?…?

「あ、申し送れました!観澤メイです!!新米エクソシストと言つ事になります」

「そうなんですかw僕はアレン・ウォーカー。今は事情があつてかばちゃ被ってますがエクソシストですよw」

そういつて、アレンを名乗る少年は手を差し出した。私はその手に触れ、握手をした。魔女の服を着た人はミランダ・ロットーさんといい、此の人も少し前にエクソシストになって黒の教団に所属しているらしい。でも何故かばちゃと魔女の劇場のお手伝いを…?;

第1夜：かぼちゃ少年：メイ（後書き）

此の話はあのミランダさんが始めて登場した「巻き戻しの街」の話です。もうミランダさんはエクソシストとして目覚めました。ただ少しかぼちゃと魔女のチケット配りのお仕事をしているという設定で……

とりあえず、次回は黒の教団に行きますよww

第1・5夜：迷い少女：アレン

僕とミランダさんはミランダさんが覚醒かくせいした後に、またチケットの販売を続けていた。何故かって？其れは多分…ミランダさんが此の職に少しはまっていた様だったからですよ。

そしてかぼちゃの被り物を被ってチケットを販売していると、少女がやってきました。しかし其の少女は、何と黒の教団は何処にあるかと聞いて来たのです

『あのどうして黒の教団の事をご存知で？』

「あ、申し送れました！！私の名前は観澤メイ、エクソシストです」

『僕の名前はアレン・ウォーカー。同じくエクソシストですよ？』

どうやら此の少女は、僕と似たようなパターンで元帥に逃げられ、黒の教団に行けといわれたらしい。(一歩間違えたら逝けか…)。僕はミランダさんの事もあるので、リナリー・リーと共に黒の教団に戻る事にした。

「アレン君！！ミランダさんと…あれ？その子は？」

リナリーがメイさんの方を見つめる。やはりリナリーには言っておいた方がいいでしょう。僕はメイさんを手のひらで指しながら話す

『この方はエクソシストで観澤メイさんと言う方で、黒の教団に挨拶に行くそうですよw』

「本当！？私はリナリー・リー！よろしくね？メイちゃん！」

「は…初めましてリナリーさん…！」

メイさんは緊張して固くなっているようだったけど、どうやらいい感じのようです。その後、僕とリナリーとミランダさんとメイさんで汽車に乗って黒の教団へ戻る事にした。

「メイちゃんは日本人？」

「はい！あ、でも黒の教団って日本の方います??？」

『一応いますよ？口が悪くて男の癖に髪が長くて前髪がパツツンで馬鹿のヤツが一人w』

メイさんとアイツで日本人は二人目になることですね。メイさんは優しい方っぽいし、きっと誰かさんと比べられるだろうので実によく気分ですよ。

「そうなんですか??あ、名前なんていうんですか??？」

「かんだ神田ユウって言うのよw」

リナリーがアイツの名前を呼ぶ。神田ユウ、あいつは僕の敵と言ってもいいでしょう。僕のことを”モヤシ”と呼ぶ屑ですしね…本当に嫌いなヤツですよ…

まあメイさんが日本人と言う事で親睦でも深めてみてはどうでしょうか?どうせ神田のことだから”絶対”に相手にはしないでしょうね。あの人はきつと人と拘るのが苦手なんでしょう。頭の脳みそが可笑しい人でしょうしね。

「神田ユウ…って言うんですか?じゃあ教団に着いたら挨拶しないと！同じ日本人としてw」

メイさんは何処となく嬉しそうなそぶりだった。まあ同じ日本人って事だから嬉しいのでしょう。でも神田には挨拶しない方が身のためですよ?僕の初対面も最悪でしたし…

神田はまあ初対面で女性の方に六幻を向けることはないでしょうが、怒らせないように挨拶に行かせる時はリナリーも同伴してもらいましょうか。

第1・5夜：迷い少女：アレン（後書き）

：えーっと、アレンが少々黒い場面が多いですが、アレンファンの方、申し訳有りません（土下座）

しかも今回のアレンは神田に対してすっごく悪く言っておりますが、本当にごめんなさい！！

多分次回かその次ごろに神田を出させてもらいます！

なお、『1・5』とは視点が変わって他のキャラが思うことを書かせてもらいます！

第2夜：教団：メイ

その後、しばらく汽車に乗った後に、私は塔を見つめた。

…この上に黒の教団が…???と言うか高！！デカツ！！言葉でしか説明できないけど、ほんつとうにでかい！！ありえないほどに…！！

『…大きいですね…』

「正直に言つていいのよ???」

『…デカイ黒い高い』

「其処まで本気で言われますとコムイさん吃驚かと…」

私は唯、リナリーちゃんが本当のことを言つていいと言つたから言つただけですよアレソ君…！！

とりあえず、私は目の前にある塔の中に足を踏み入れることにした。其処で門番が話す

「誰だああ…！！その女ああああ…！！」

「門番、この方はエクソシストです。検査を試みてください」

門番の目が光、私を見る。実に不愉快だった。しかも何をするか先ず言つてほしいです…！！其の事はおいておいて、門番がまた話し出した。

「コイツ人間…！かいもおおん…！！」

そういつて門が開かれた。何よこの門…すつごいおかしい…喋るし変な話し方するし…第一見ているだけで気持ち悪い…ああ、これは絶対に声に出しちゃ駄目よね？（笑）

私は先に歩くアレン君の後ろについていきながら中に入る。

「あ、リナリー。メイさんをコムイさんのところに連れて行ってくれます?」

「いいわよ。じゃあ行きましようか?」

そういつてリナリーちゃんは私の手を引きながら歩き出す。少し小走りっぽく感じるけど…コムイさんってどんな人?確か元帥が紹介状を送ってあるって言うてあるけど…??

しばらく歩いて、私は室長室の前につれてこられた。

『リナリーちゃん…もしかしてコムイさんって…』

「知らなかったの?兄さん…あ、コムイ兄さんは私のお兄さんなのよ、その兄さんは室長」

知りもしませんでしたよ…そもそも黒の教団自体も知らなかったのに…!!…つとと言うか、リナリーちゃんのお兄さんってことは…相当カッコいいのかな??リナリーちゃん自体がすごい可愛いし…やっぱり美男美女よね!!

「兄さん?新入りをつれてきて…あ、寝ているわ」

「どうやらコムイさんはお眠り中らしい…私は傍に近寄る。」

うーん…やっぱり寝顔じゃあカッコいいかカッコよくないかわからないなあ…、誰かこの人起こしてくださいー!!…ってとりあえず私が起こす???

『えーつと…コムイさん…??』

「そんなのじゃ室長はおきないぜ?ちょっと待ってな…室長、リナリーちゃんが結婚するってさ」

「リーナ…リイイイイ！？僕は許さないよ！？誰だい！！僕のリーナリーと結婚するのはああ！！」

『うざ！煩ッ！シスコン！！』

「見ての通りこの人シスコンだからそれと、この人此れじゃないと起きないから」

よく分らないけど、白衣を着ているおっさんがコムイさんを起こしてくれた模様…っと言うか、この人誰だよ？？

しかもコムイさん…見事にシスコンっぷり…リーナリーちゃんに抱きついてるし…その絵図すっごいウザ…！！見ているだけで本当の事言っちゃったよ（笑）それにしても…こんな人が室長って…馬路…???

「何だ、新入りをつれてきてくれたんだねw僕の名前はコムイ・リー。見ての通り室長でリーナリーの兄さ！！宜しくね！！」

『初めまして！観月メイです！！新米エクソシストです。不束者ですがどうぞ宜しくお願いします！！』

まあ初対面の方には礼儀良く！！観て第一声が死語だったけどね…??（笑）

「ところで、メイ君の対アクマ武器は何なんだい??見る限り寄生型ではなさそうだが…」

『私の対アクマ武器はこのナイフです！！』

そして私は腰に挿してある鞘からナイフを出す。鞘さやと柄えが緋色になつてある。結構気に入っているんだ

「へえ…イノセンスがナイフに…ねえ…キミと同じ日本人の人も刀なんだよ」

『そうなんですか??あ、神田って言う人ですよね?』

「そっだよw後で挨拶に行っておいでw同じ日本人同士として あ、メイ君のイノセンス発動させてみてくれる?」

『わかりました。…発動…』

そういうと、私のナイフ…『ブラック・ナイフ黒刀』をはつどうさせる。私のナイ

フは長くなり、ナイフの部分は真っ黒になった。コムイさんとリナリーちゃんは「わぁ…」って言いながらコムイさんはナイフに触り、突いたりしていた。

「うん。やっぱりメイ君の対アクマ武器はナイフなんだね」

…だから言ってるじゃないですか。

第2夜：教団：メイ（後書き）

…もうどうしましょうか？

今回はコムイさん登場wwwwでもってナイスシスコソっぷり（爆
さて、次回は衝撃的な出会い方でアイツと会いますよwwwwそれで
はッw

第3夜：真っ赤でこんにちわ：メイ

私はその後、コムイさんが『一回、神田君かんだに挨拶あいさつ行つといで、其の後に行く所があるから早めにねww』つと言つと室長してから私とリナリーちゃんを出した。全く…あの人は一体どういう神経しんけいしているんだろ…

とりあえず、神田つて人に逢えるんだからいつかww私はリナリーちゃんに誘導ゆうどうされながら神田を探す。

「あッ！メイちゃんいたわよw神田！」

「あ？…なんだよりナリーか。其のちっこいのは何だ？」

「神田！ちっこいのって何よ！この子は新しく入団にゅうだんしたエクソシス

トの

『観澤みさわメイ、同じ日本人らしいです！よろしくね？』

「はッ。こんなのが一緒の出身だとは嬉うれしくねえな」

ブチッ

つと私の怒りの線が切れた。つかキレた。何だよコイツ！！！！！アレンのいったとおりパツツンでポニテの変人へんじんで馬鹿ばかっばい！！！！私は神田に殴なぐりかかろうと飛び込こむと、神田は後ろの下がったかと思えば何かに滑すべって後ろの倒れこみ、私は其の上に乗っかかり…

チユッ

「あら？そつだつたかしら」

絶対人の不幸を楽しんでるよりナリーちゃん！！！！／／／／神田はその場に座り込んで手で口抑くちおさえてるし…もう最悪さいあく！！！！なんでこんな不慮ふりよの事故にあわなきやいけないのよ！！！！／／／／私は何とか腰こしが抜ぬけた身体からだを正常せいじょうに戻もどし、リナリーちゃんから離はなれると、神田を指差さしし叫さけぶ

『いい！？これは事故だからね！？もうさっきの事は忘れること！
！／／』

「さあな……忘れたら忘れる…／／」

はあああッ！？つと私は目を見開きながら神田を見てみると、神田は立ち上がって顔が赤いままどつかへ歩いていった。

ちよつと……何よ忘れたら忘れるって…！！！！意識するじゃんかよ神田あ！！！！！！／／／／

「フフツ…アレン君が入ってから楽しかったけど、益々楽しくなりそうね」

そんなお気楽に言わないでくださいよりナリーちゃん…鏡を見ると私の顔は神田見たく真っ赤で、心臓はバクバク煩かった…／／／／

第3夜：真つ赤でこんにちわ：メイ（後書き）

すみませえええん！！！！（土下座）

いや…神田わね？元々ネタバレするとくっ付ける計画ですから…つか衝撃的な出会いはこれっすよ（汗）

しかもこのまますすむと…大人の階段上るんですが…これでも分からない方は恋のABCといえわかるのでしょうか…??

馬路に神田ファンの方、申し訳有りません！！！！

もうこれ以上キャラの崩れて主人公とくっつく神田を見たくないという方はどうぞ見ないのを勧めしますよ…??（怯え）

第3・5夜：ちっせえ新人：神田

今日もジェリーの蕎麦を食堂で食ってたら探索部隊ファインダーがまた泣きながら他のヤツ等の死を言うもんだから飯がまずくなりそうだった。そこにまたもやしが来て

「神田、アナタに面会したがってる人がいるので室長室まで行ってくださいね」

”手を出したらぶっ飛ばしますから”とボソリと言いながらジェリーに大量の飯を注文しに行きやがった。…手を出す？俺がそんなことするわけないだろ。そんなことは兎にでも行っておけよ。いつでも煩いやツだしなとりあえず俺はもやしに言われたとおりコムイのところに行くことにした。

「あら神田W丁度よかったわ」

この甲高い声はリナリーだろう。俺は右から聞こえる声に応じるように声がするほうを見る。

其処にはどう見たってリナリーの頭一個分はちいせえ女がいた。何だよコイツ、東洋人か？って事は俺と一緒になるのか

「この子、新米のエクソシストさんW名前は」

「観澤メイっていいいます！同じ日本人さんなんですよね??？」

『悪いが俺の”同じ”の分類に入る人間はそんなちっせえのはお断りだな』

コイツ、もやしみたいに黒そうにねえから普通に怒ってくるだろ
うな

「い、いい!!? コレは事故!! 今のき…キスはノーカウントだからね!!? / / / /」

そういつてるわりには随分意識してるなこのチビ。リナリーよりは正しい反応だろうがな

だが俺はだんだんこのチビにキスされたって事を自覚してきてしまった。

『わかって「あら、これは立派なカウントよ」

何楽しそうに話しやがるんだ。俺はこれをノーカウントのままにしておきたいんだよ。

俺は絶対に認めねえぞ

「リナリーちゃん!! コレは事故だつて!! / /」

「何言ってるのよW日本以外ではキスなんて挨拶じゃないの」

確かにそうだがそれは頼だ

「それは頼でしょ!!! / / / /」

マジにそうだ。リナリー変に言うんじゃないやねえ

「いいでしょ別に 頼も口も一緒のようなものよ」

ちげえよ。女ってもんはキスと違って大事にするもんだろ? この女、人の不幸を楽しみやがって…。

俺は自分の頬が赤いのに気づいた。…なんでこの俺が赤くなって
いるんだよ…。

そのまま俺は立ち上がり、その場を離れようとした。

「ちょっと神田!! いい!? もう忘れてよね!!? / / /」
『忘れてたら忘れてやる… / / / /』

何いってやがるんだ、俺。そのまま俺は部屋に戻った。

第3・5夜：ちっせえ新人：神田（後書き）

はい皆様お久しぶりでございます。

神田視点、どうでしたか？神田のキャラは少し扱いにくいやつでしたが；；

ちよっとリナリーとか神田の言葉とか変わっているかと思いますが、その方が面白いと思いましたが

リナリーは自分の中では腹黒い女の子だと思っているので神田にも伝染…w

さて、読者人数を数えてみると凄い数で…ありがとうございます！
！嬉しいです！！（感動の涙

これからも頑張りますのでどうぞよろしくお願いいたします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1761c/>

星と星が惹かれあう時

2010年10月31日03時56分発行